

# 化粧品産業競争力強化検討会 第5回

## 議事要旨

日時：令和8年3月24日（火）15:00～18:00

場所：経済産業省別館 11階 1111 各省庁共用会議室（対面・オンライン併催）

### 1. 産業構造のあり方について

韓国、フランス、日本の産業構造の違いについて以下の言及があり、我が国においては、ファブレスのベンチャー企業による新規ブランドの立ち上げや、海外マーケティングを主業とする起業が増加しつつあるところ、垂直統合モデルのメリットを生かしつつも、これらの積極的な活用や既存企業による積極的な投資により、専門性と競争力が高い個社が有機的に結びつくエコシステムを構築・拡大し、輸出団体とともに全体最適化を図っていくべきであり、政府も、この方向性に沿って政策を進めていくべきであるとの見解が示された。

韓国：ODMを中心とした水平分業構造が特徴であり、ODMに資本やノウハウが蓄積した結果、製品開発から市場投入までの行程が効率化され、近年顕在化している需要サイクルの短期化に対応できていることが競争力の源泉となっている

フランス：巨大化粧品メーカーと専門性の高い中小企業が集積するクラスター型の産業構造を持ち、専門性と協調の組み合わせによって競争優位を確立している

日本：垂直統合型のビジネスモデルが多く、開発期間の長期化、固定費の増加、規制対応の重複負担等が全体的な競争力の低下に繋がっているが、中長期的な研究開発や品質管理体制を築きやすいため、高い安全性と信頼性という日本の強みにも繋がっていることには留意する必要がある

### 2. 中間報告書骨子（案）について

若干の文言の修正について議論が行われた後、案を取って公表することが了承された。骨子に反映されていない主な発言は以下のとおりであり、中間報告後の検討会における議題整理において取り上げることとなった。

- 商品カテゴリーや価格帯などに関し、日本勢としての勝ち筋を示すべきではないか（事務局より、世界の様々なマーケットに向けた固有の企業戦略を持つ多数の企業がある中で、短期間でそのような勝ち筋を示すことは難しい、勝ち筋の方向性に関する広範囲のセンチメントが見えてきた段階で政府が背中を押すというのはあると思うので、今後の検討課題としたいと回答）
- グローバル展開で成功している化粧品企業について、成功要因（投資、M&Aを含む）の調査・分析・共有が必要ではないか

- 国内の効能試験ラボは他国と比べて小規模かつ数が少ないため高コストであり、海外ラボに依存している企業が多いので、広告規制が緩和された場合は海外依存が一段と進むおそれがあるのではないか
- 海外と日本では品質に対するマーケットの要求水準に差があるため、そのようなマーケットに向き合っている日本企業の製品が過剰品質に陥り、結果として世界での競争力を失っている可能性がある
- 軽微な不具合でも全量回収となる現状は問題であり、食品分野のように、リスク分析に基づき回収範囲の基準を設置するなどの対応を化粧品においても検討するべきではないか